

新發明「キネトスコープ」： 雜録

著者	寛州生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 3
ページ	2 3 - 2 8
発行年	1895-01-30
その他の言語のタイトル	新發明「キネトスコープ」： 雜録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4512

第二 入梅及び半夏生 夏至のときは大陽の黃經度は正に九十度あり而して入梅は其前十度のとき即ち夏至より大凡十一日前にして半夏生は其後十度のとき即ち夏至より大凡十一日目あり

第三 彼岸 春は彼岸は春分の三日前に始り三日後に終り秋の彼岸は秋分の三日前に始り三日後に終る而して春分日及び秋分日を彼岸の中日と云ふ

第四 節分 立春の前日を節分と云ふ

第五 八十八夜及び二百十日 立春より八十八日目を八十八夜と云ひ二百十日目を二百十日と云ふ
第六 社日 社日とは彼岸の中日即ち春分日若くは秋分日に最も近き戌の日あり若し彼岸の中日が二つの戌の日の真中に當るときは前の戌の日あり

新發明「キネトスコープ」

寛 州 生

キネトスコープ Kinetoscope は、近年エザソン氏の發明せる運動寫眞の覗眼鏡に於て、我國には未だ到來せず、歐洲に於ても、只流行の源地巴里に行はるゝのみ、此の器械の如何に人氣よきか、如何なる新工夫にて出來たるか、暗箱中を覗けば如何に面白きことの見ゆるか、何故に繪が生き且つ語るか、此器械は如何なる器械より生じ來たるか、如何にして混雜なる運動を寫眞にするか、視覺の幻惑が如何に應用されたるか、此れ器械が子孫に如何なる便利を與ふるか、余は此等に就て讀者に紹介せんと欲す、讀者は暫く磊落なる觀念を袖に収め、一部の思想を以て之を讀むを可とす、

佛國巴里に知己ある人は其人に聞け、夜間九時より十時の頃、巴里の廣場ポアソニエールの二十番に、電燈皎々店頭を照すあり、門内にて、群集は眼を一の眼鏡に寄せて、何か一心に面白げく視居れり、此

邊を行き通ふ商人閑客、之を見て何か、彼等は何を視るか、人が視るから吾も視んとて、ろろくと立ち寄れば、店の番人は閑客に向ひ、『サア御覽あさい、大入りです、四方の閉ぢたる箱です、高さ二メートルです、只一つの穴があります、穴には眼鏡が付て居ります、五錢を御出せあさい、此端にある箱の中は視られます、此の器械はエヂソンのキチトスコープであります、當歲暮に大繁昌の見せ物でございます、數月前では、此器械の發明ありしと聞ても、未だ大西洋を渡て來ぬのは残念だと、云て居たのです、今日では最早到來しました、此は皆な數枚の二百圓札に價します、之を見る御人に取ては、大ぬによき御慰めであります、屹度仰天なさるでしよ、幻燈ははや古手です、テヤトロフオーン（居ながら聞く芝居）も珍しくありません、珍いのは只此の器械です、マアマア御覽」と大賑ひ見物人山をなす、巴里今日の大人氣は此のキチトスコープあり、

キチトスコープの母はグートロープ及びアラキシノスコープあり、キチトスコープは是より發達し來れるものあり、今其要領を言はん、設令ば曲馬場にて、曲馬者が箍圈を透過するの圖を、一枚の紙に二様に書き、第一を箍圈以前の有様とあし、第二を已に經過の有様とす、之を巻物にまて急に眼前に解きつゝ進めれば、殆んど同時に二様の模様を見るが故に、宛かも其經過の動作を見るが如く覺ゆるなり、又茲に三つの續き繪ありと想像せよ、第一は、紳士が椅子に腰掛けんと決意せる所、第二に腰を屈して、臀を椅子に運ぶ所、第三は、既に正しく腰掛けたる所とあし、之を眼前に速かに進む時は、連續せる印象は、眼の網膜に幻惑を生じ、第一繪の遺象は、第二繪と重なり、視覺に感ずる所は、宛も此紳士が現に此動作をなす如きなり、此れ即ちグートロープの原理にして、キチトスコープも亦此より發達したる精巧の器械たるに過ぎず、

此故に、或る法に由て、運動に於ける物体を急に且つ數多く寫眞に攝取すれば、眼をして、愈々巧みに此の幻惑を感じしむることを得べし、千八百七十八年に、亞米利加人、ミユイブリッヂが、馬を馳驅若くば驚走に於ける、多くの連續せる寫眞を、長き板の紙に撮りたり、然らば此馬の作用中殆んど凡ての有様は、皆な此寫眞中に存するが故に、前同理にて眞に走れる馬を視覺に感ずることを得たり、彼のマーレー氏が人類及び動物の運動を研究するに、大に與て力ありたるクロノフォトグラフヒー Chronophotography は、全く此の外ならず

クロノフォトグラフヒーはツイトロープより、精良ありと雖も、キチトスコープのクロノフォトグラフヒーに勝ること、此比にあらず、而して其構造も尙ほ面倒あり、只原理に至ては同じ、此を視るものは實に現場に臨むが如く、複雑なる部分も、僅少の動作も、實際の通りに顯はるゝを以て、奇体々々、此は夢には非るやと、思はず目を擦るあり、

其構造を説くに先ち、今日巴里に流行するキチトスコープを覗けば、如何なる事の仕掛けられたるやを紹介せん、初め暗箱を覗けば、中は即ち暗あり、忽ちに之て電燈白晝の如く、忽ちにして舞蹈始まる、最も美あるは、ロアフューレーの蛇の舞あり、最も眞に迫まるは、散髪所の景なり、入り来る客あり、散髪屋禮を以て之を持つ、臙て鬚を剃り始む、尙ほ五錢を拂はば、洗濯所あり、次に雞闘あり、其最も可笑きは、舞蹈場の喧嘩あり、集人騒動し、拳を擧げて敵を打つあり、掴み合あり、よく見れば見る程、本當の人の喧嘩に相違なし、眼は眼鏡を覗て居りながら、口は思はず言ふ、『吾は拳術芝居に來て居る』と、嗚呼奇妙此の「キチトスコープ」……………、

人は此器械の應用に就き、様々の事を豫想するは自然の理なり、曰く、『後日は必ず歴史的の記録、此

を應用するからん、例令ば、吾人は吾人の像を、吾人の子孫に遺すも、只油繪若くば寫眞を以てしたまふとも、向後はキチトスコープの圖を用ゆることを得ん、然らば吾人の子孫は、吾人の婚禮の場も侍することを得べく、夫婦伴ふて、祭壇の前に詣で、神に對して二世の誓をなすを見得べし、又財産遺囑の現場をも見るべきなり、然らば紀念物としても、又は法律上の證據としても、便利をなすこと幾何ぞや」と、

實に逝ける先祖も蘇り、若く且つ美にして、進退應接するを見らるゝのこならず、彼等が語る言をも聞くを得べし、何とされば、撮音器の助けにて、此の器械に物言はせ得ればなり、要するに、歴史的應用の功たるや、實に此の如くあるべく、過去の事を悉皆此器械に藏したらんには、子孫は先祖を見、且つ聞く爲めに、冥途に旅立つ必要をからん、眞にこれ理學的魔術なり、

エヂソンのキチトスコープの構造を知らんと欲せば、請ふ、以下の記述を讀み續けよ、

キチトスコープの主たる部分はキチトグラフあり、此は前述のクロノフォトグラフの如きものなり、之を造るには、或る變化しつゝある物体を、一秒時に四十六枚撮影するを適當とす、精しく言えは、二十八ミリメートルの長さの種板を、次第に物体の前を進み行き、一分時の終りに、二十八ミリ即ち全長を經過する如く仕掛け、其間に、物体の二千七百六十種の連續變體を撮る取るあり、此の背面種板を正面寫眞に直すべし、此の正面寫眞に撮る板は、板にあらず、玻璃にあらず、巾二センチメートルにして、長さは時間に比例する透明なる紙帶あり（故に若し二分間の運動あらば、長さ四十八ミリメートルなり、通常十五メートルありとす）今、通俗の觀念を以て之を思ふも、與えらるる速度の種板に、物体の運動の有様が寫て、此の寫眞を得たるが故に、此寫眞を同じ速度に動かして、之を見

れば、此寫眞は還元さるゝ理あり、即ち同じ物体の同じ運動の有様が、視覺に感ずる理あり、即ち此の紙を規則正なき運動にて、網膜の遺像に因て生ずる幻惑は、人をして物体の眞の動作を感ぜしむるあり、即ち此帶紙を小さき圓筒内に巻き込み、此の如き速度に引き出し得べくして、以て暗箱中に裝置す、此の紙帶より奥に、電氣燈を用意す、又紙帶の手前には、十分廣き受け紙を用意す、蓋し電燈を以て、此の寫眞を此の受け紙に射影するものあり、故に距離を適宜にすれば、受け紙に於ける影は、實物と同じ大さにすることを得るなり、故に初め述べたるが如く、箱の高さは二メートルあり、然らずんば人間を實際の如く影せざる能はず、次に此を覗く接眼鏡の裏面に沿ふて、寫眞と同速度にて回轉する所の不透明の圓板あり、此の圓板に、間隔等しく開けたる、數多の孔あり、而して其間隔は、第一の孔よりして寫眞の影の第一姿勢を見得べく、第二を以て恰も第二を見得る如くあされり、然るときは、第一姿勢より第二姿勢に移る間は見えざるを以て、例へば肉眼にて物を視るときは、瞬きすることの決して視覺に妨げなきが如く、第一姿勢より第二姿勢に移る時を感せずして、目は全部の運動を見終るを得るあり。

別に撮音器を備へ、物体の運動中よ於ける凡ての音聲を蓄えしめ、運動に連れて、適宜に此の聲を耳に傳えしむ、

扱て、此等の運動を司り、且つ燈火を生ずる爲め、箱の一隅に、エヂンソндаイナモの備あり、此のダイナモは、八ヴオルトのものにして、四ヶの蓄電器が、三アンペールの電流を借りて、一時八十アンペールを生ずるものにて足れり、とす、

構造概ね右の如し、故に此のキチトスコープの眼鏡の傍ある扣鈕を指頭にて押せば、電流忽ち通じ、

電燈直ち發す、仕掛けられたる速度を以て、帶紙出で、同時に圓板回りて、受け紙に見事なる光景顯はれ、音聲までも、手に取る如く聞ゆるとき、視る人、餘程の變人か、又は頗る氣六つかしき人に非ざるよりは快と叫ばざらんと欲するも得べからざるあり、

寛州友人に謂て曰く、エヂソンのキチトスコープ若し早く我國に到來せば、余は北京落城の實況を、砲聲と共に此器に藏めて來らんことを欲す」と、友人之を聞て笑せり、

諫江傳記

此篇の記事は、中嶋保久さくふ人、慶應三年卯五月下旬に、謄寫せるものに係はり、名けて諫江傳記と云ふ。去歲行軍して諫早に到りし時余中嶋氏に請ふて、此寫本を閲讀するを得たり今茲に之を抄録したるものゝ掲げて、讀者の一察に供す。篇中、畧記せる處は大平記的戰爭記事の如きものにて、餘り重要な部分にあらず、讀者之を諒せよ。

乙未歲一月中流

溫知學人識

抑諫家の御神祖龍造寺七郎左工門家晴公と申奉るは太職冠鎌足公の御廟裔肥の前州水ヶ江龍造寺鑑兼公の御嫡男龍造寺隆信公の御曾君あり（略）薩州竟に平均えて秀吉公御歸陣之上九州の諸侯へ各本領安堵の御敎書を賜り家晴公へは西郷純堯ただ前に薩摩征伐の催促は從はざるの故を以明地召上られ諫早を家晴公へ賜るの旨嚴命あり外に藤津郡小城郡杵嶋郡の内を加へて本地貳萬六千石御朱印の書を以宛行れ御喜悅斜ならずとや此時家晴公へは筑後一國給るべし大國拜領の事故先例に任せ御禮金差上らるべきの由淺野殿より達せらる然れども俄に黃金百枚の調達出來がたく御請取相叶はず仍ち伊佐早を賜りたり

西郷左衛門太夫純堯は西郷石見守尙善其子肥前守純久の嫡男にて數代伊佐早を領せ是も太職冠鎌足